

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第758号 平成26年6月24日

議員の品格

去る6月18日に開催された東京都議会における野次は、今各界各層から厳しい非難に晒されています。

問題となっている野次は、一般質問に立ったみんなの党所属の塩村文夏議員の子育て支援等に関する質問に対して、自民党席の議員から「自分が早く結婚しろ」「産めないのか」という野次が飛び、それに釣られるように男性議員の笑い声が上がったというものです。

塩村氏はツイッター上で、野次を飛ばした議員に名乗り出るよう求めています、今のところ誰が野次ったのか、特定されていません。

こうした事態の中で、自民党の野田聖子総務会長は、記者会見でこの問題について「とても不愉快だ」と批判していますし、同じく自民党の石破茂幹事長も「発言者は自ら名乗り出るべきだ」と述べています。

公職にある者による、議会という公式の場での明らかなセクハラ発言に対しては、呆れるというより情けなさを禁じ得ません。

「野次は議会の華」という言葉があります。華かどうかはともかく、議会と野次は付きものという感じがします。私も、道議会の本会議場で答弁する機会が多々ありましたが、しばしば野次の砲火を浴びたものです。

軽妙洒脱な野次は重苦しい議場の空気を和ませてくれたりしますし、逃げの答弁に対して急所を突く野次が飛んで来ると理事者席には緊張が走るといった具合に、上手い野次を耳にすると「野次は議会の華」だなと感じます。

ただ、議会での野次の多くは、言葉尻を捉えて煽ったり、貶めたりするといったレベルのものが少なくないように感じます。

そういう点からすると、野次に品格を求める事には無理があるのかも知れませんが、ただ、今回の野次問題は、議員としての品格は如何にあるべきかという大変大事な問題を提起しているように感じますので、今日はその事について考えてみたいと思っています。

今回の野次問題は、今や発言の中身もさりながら、発言したのは誰かという犯人探しの様相を呈して来ました。

恐らく、誰が発言したか知っている議員はいるはずですが、少なくとも発言者の隣にいた議員は分かっているはずですが、それでも、今のところ誰が発言したか不明と

というのは、皆でかばい合っているからでしょう。

野次を飛ばした本人が名乗り出ない理由は、何処にあるのでしょうか。それは多分、野次そのものの匿名性にあるのではないかと思います。ネット上では、意に沿わない発言に対して口汚く罵ったり、誹謗中傷するようなメールが飛び交っていますが、メールの匿名性がそれを助長している側面が強いのだと思います。

議会の野次も、純粹には匿名とはいえませんが、余程議会を冒瀆するような事でもいわない限り何をいってもいちいち取り上げて批判しないという風潮(慣例)は、匿名性で守られているネット上のやり取りと大同小異ではないでしょうか。

いいたい事があるなら堂々と発言したら良いのではないかと思います。そうしないのは、自分の発言に対して責任を取るつもりがないからだと思います。

野次を飛ばした議員は、深い考えもなく(つまり、自分の発言がセクハラに当たるという認識もなく)ただ、議場の空気を面白くかき回そうとしたのではないかと想像しています。ですから、初めから自分の発言に責任を持とうという気はなかったでしょうし、今回の事態は青天の霹靂という感じではないでしょうか。

問題がどんどん大きくなって、名乗り出たくても名乗り出られない、といったところかも知れませんが、首をすくめて風が過ぎ去るのを待っている、そんな議員に政治家としての品格があるとは思えません。

また、問題なのは野次を飛ばした当人だけではなく、それを面白がって笑った同僚議員の存在です。議会内部で、しっかりとこの問題に決着を付けようとならないのは、野次に共感している議員が少なくないという事かも知れません。こういう不透明感を放置しては、「女性が輝く日本」を創ろうという安倍総理の構想も、結局はお題目に終わりかねません。(塾頭：吉田 洋一)